

# 熊本らしい色彩景観をつくるために

## このガイドラインの使い方

### 1-1-1 ガイドラインの位置づけ

このガイドラインは、『熊本県景観計画』によって定められた景観形成地域や特定施設届出地区、大規模行為などの景観形成基準のうち、色彩に関わる項目をより詳しく解説することを目的としています。

国・県・市町村の景観形成担当者をはじめ、施主、設計者、施工者、地域住民の方々など、さまざまなかたちでまちづくりに関わる多くの人たちに、熊本らしい色彩景観づくりを進めていくための手がかりとして利用していただけるよう、地域の特色や施設の規模などに即した色使いの考え方を具体的に紹介しています。

### 1-1-2 ガイドラインの構成

このガイドラインは、次の7章によって構成されています。

#### 1 熊本らしい色彩景観をつくるために

1では、このガイドラインの活用方法や、ガイドラインの内容を理解していただくために必要な色彩と景観の基礎知識を紹介しています。

#### 2 景観形成地域の色彩ガイドライン

#### 3 特定施設届出地区の色彩ガイドライン

#### 4 大規模行為の色彩ガイドライン

2・3・4では、『熊本県景観計画』に定められた地域や地区、行為などの色彩の考え方を具体的に紹介しています。

#### 5 重点地域の色彩ガイドラインの提案

5では、『熊本県景観計画』に基づく指定地域以外で、景観形成を重点的に進める必要がある地域・地区の色彩の考え方を具体的に提言しています。

#### 6 公共事業等の色彩設計

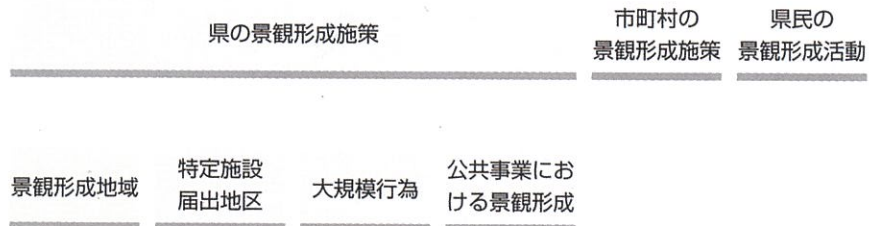
6では、熊本らしい色彩景観づくりの核となる公共事業等の色彩設計の手順などを紹介しています。

#### 7 色彩をいかしたまちづくり事例

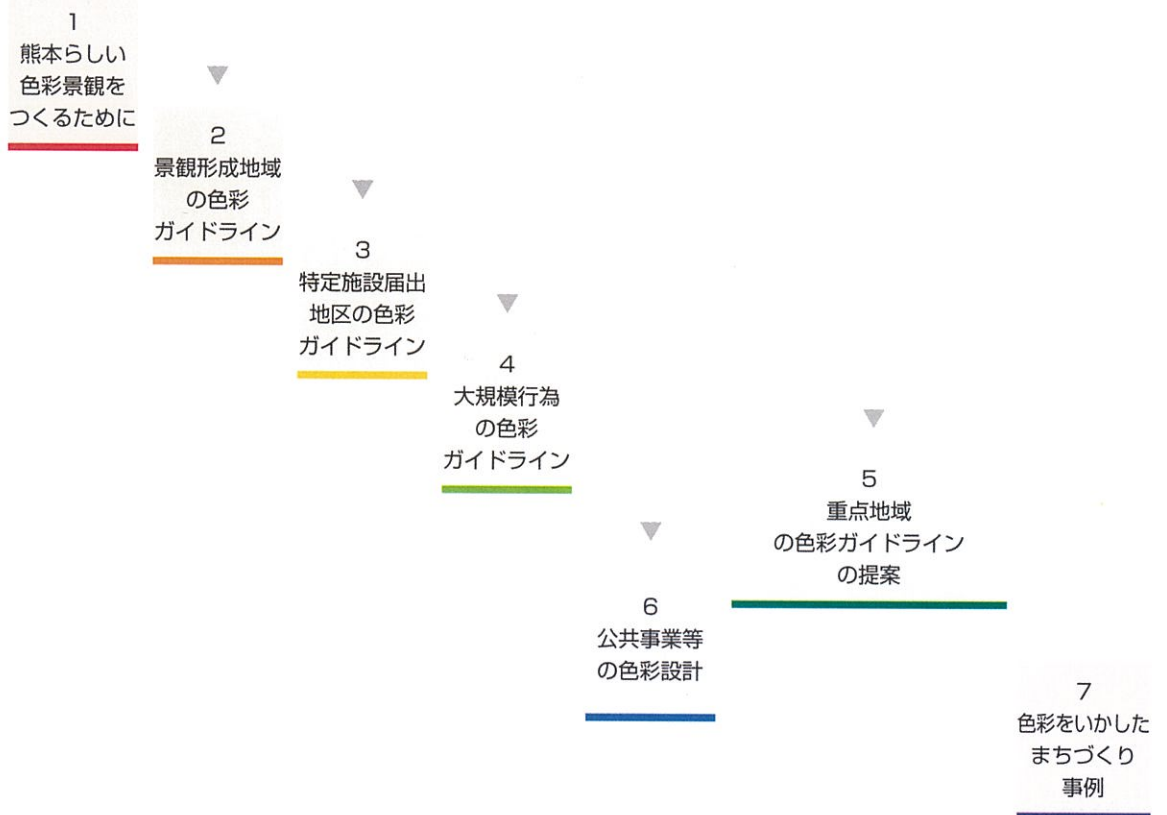
7では、色彩景観に配慮した広告物や建築物、色彩をいかしたまちづくりを進めている全国の地域・地区の事例を紹介しています。

熊本県景観計画及び景観条例地域の特性を生かした景観の保全と創造を図り、緑と水が豊かで、県民にとって誇りと愛着のもてる県土を醸成することを目的として、景観形成地域や特定施設届出地区における行為や一定規模以上の行為について事前の届出を義務づけています。

## 景観形成基本方針



**色彩景観ガイドライン**  
熊本県景観計画に基づく各種の景観形成基準のうち、色彩に関わる項目をより詳しく解説し、景観計画の主旨に沿った色彩景観の形成に役立てていただくことを目的としています。



■図 景観条例とガイドラインの対応



### お急ぎの方へ

#### ガイドラインの早引き

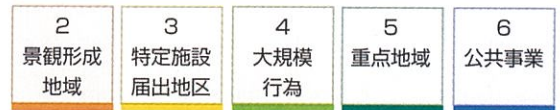
上の図をみても判るように、このガイドラインは、『熊本県景観計画』に定められた地域・地区、行為などに対応して編集されていますから、計画対象がどの項目に該当するかが判っていれば、全体を読まなくても、各章の帯色をたよりに、必要な情報を手早く得ることができます。



まずはじめに、ガイドラインの予備知識を身につけます。

#### 1 熊本らしい色彩景観をつくるために

該当する項目にジャンプします。



事例を参考にするのも良いでしょう。

#### 7 色彩をいかしたまちづくり事例

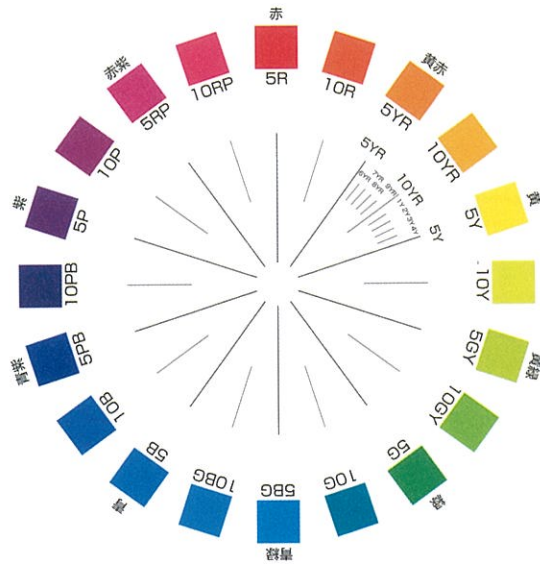


## 色彩のものさし —マンセル表色系

一般的に色彩は、赤や青等の「色名」で表現されていますが、同じ赤や青でも人によって思い浮かべる色彩はさまざまです。

より正確に色彩を伝達するためには、個人の感覚に基づいた表わし方ではなく、多くの人が共有できる客観的尺度が必要となります。

このガイドラインでは、発注者や設計者、施工者などが同じ色彩を共有できるように、日本工業規格(JIS)にも採用されている「マンセル表色系」という色彩のものさしを使って、色彩を表わしています。



■ 図 マンセル色相環

### 1-2-1 マンセル表色系のしくみ

マンセル表色系では、「色相」、「明度」、「彩度」の3つの属性の組み合わせによってひとつの色彩を表わします。

#### ●色相

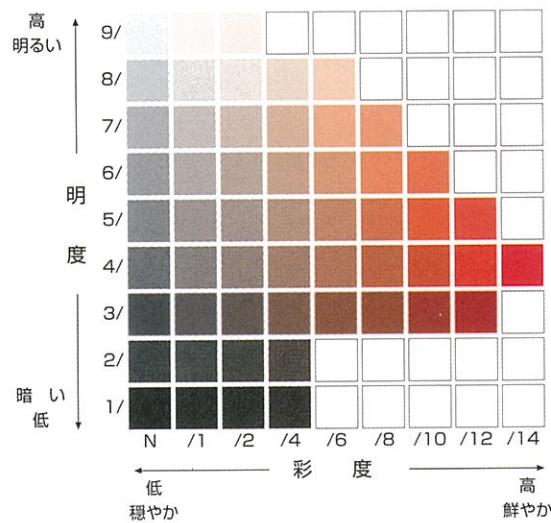
色味の違いを色相として表わします。色相は、R(赤)、YR(黄赤)、Y(黄)、GY(黄緑)、G(緑)、BG(青緑)、B(青)、PB(青紫)、P(紫)、RP(赤紫)の10色相の頭文字と、その変化を表わす0から10までの数字を組み合わせる用います。

#### ●明度

色彩の明るさの度合いを明度として表わします。0から10までの数字を用い、明るい色彩ほど数値が大きくなります。無彩色はN5.5などのように最初にニュートラルの意味を表わすNをつけて明るさの度合いだけで色彩を表わします。

#### ●彩度

色彩の鮮やかさの度合いを彩度として表わします。鮮やかな色彩ほど数値が大きくなりますが、最大の数値は色相によって異なります。



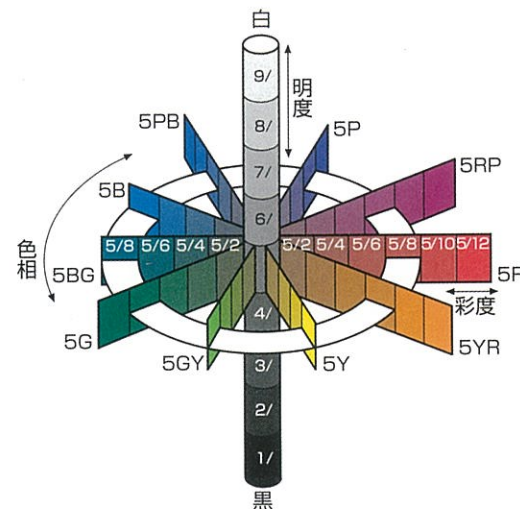
■ 図 色相5Rの色彩

### 1-2-2 マンセル記号の表わし方と読み方

5R    4    /    14  
色相   明度   彩度

3つの属性の尺度を、色相、明度、彩度の順に並べたものがマンセル記号です。

上の例の場合は「ごアール、4の14」と読みます。



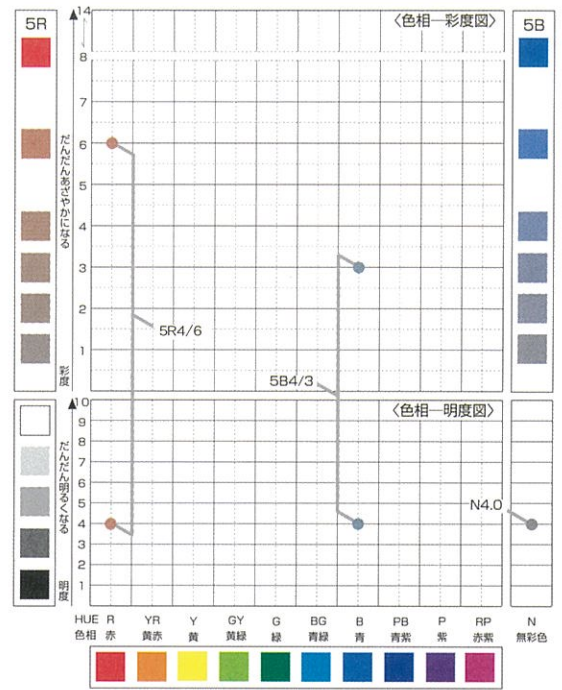
■ 図 マンセル表色系のしくみ

※マンセル表色系の色票集は、「標準色票」として、(財)日本規格協会から発行されています。

### 1-2-3 マンセル色度図

マンセル表色系によって表わされた色彩は、マンセル色度図としてグラフ化することができます。色彩のデータをマンセル色度図に変換することによって、周辺環境の色彩などを客観的に把握することができます。

右のマンセル色度図は、〈色相—明度図〉と〈色相—彩度図〉の2つのグラフから構成されており、2つの点で1つの色彩を表わします。無彩色は、鮮やかさを表わす必要がないため、〈色相—明度図〉上の1つの点で1つの色彩を表わします。例えば、次の色彩は、それぞれ右のグラフのように表わします。



■図 マンセル色度図

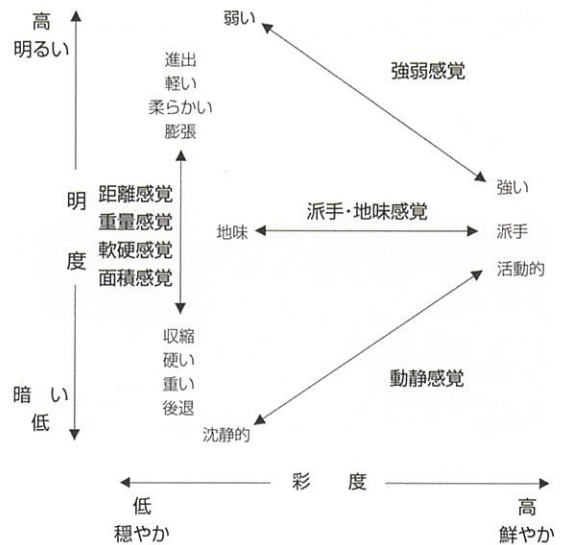
### 1-2-4 トーン

色彩の三属性のうち、明度と彩度を組み合わせたものをトーンと呼びます。

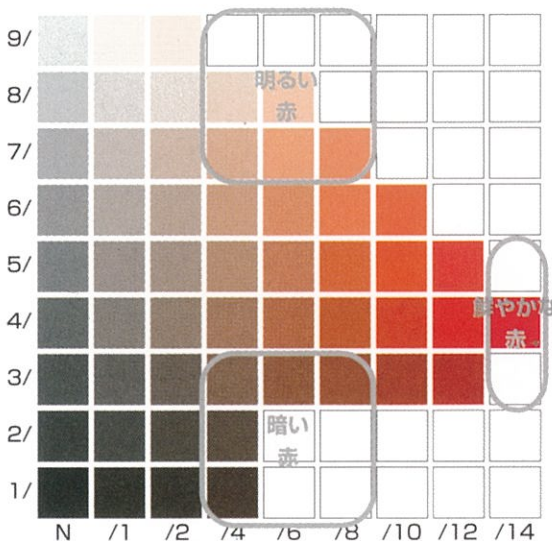
明るさや鮮やかさが似ている色彩は、色相が異なっても強弱や軽重、濃淡などの印象がほぼ共通しています。

色相を3つの属性で表わすとやや煩雑でわかりにくいところがありますが、トーンを考え方をうると、より直感的に色彩を捉え直すことができます。

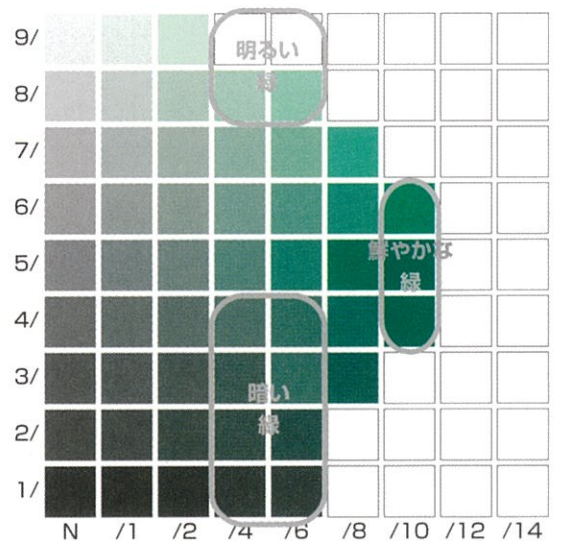
このガイドラインでは、マンセル表色系を基礎として、色相とトーンによって、景観形成地域や特定施設届出地区、大規模行為などで使用することを避けた方がよい色彩や推薦する色彩の範囲を定めています。



■図 トーンと色彩の印象



■図 色相とトーン





## 熊本らしい色彩景観

## ●雄大な自然と豊富な歴史的・文化的資産

熊本の色景観は、阿蘇や天草など、県内、九州はおろか、全国的にもよく知られた豊かな自然を基調としてかたちづくられています。

阿蘇の山々の緑や、天草の海の碧は、時間や季節とともに移り変わり、人の手ではけっして作り出すことのできない美しい色彩で多くの人々を魅了しています。

一方、県都熊本市をはじめとした都市部では、地域が蓄積してきた歴史や文化を反映した、品格のあるまちなみが形成されつつあります。

こうした熊本を代表する景観の中に見られる色彩は、いずれも穏やかで見る目にやさしく、熊本の自然や文化の豊かさを感じさせるものです。建築物や工作物などが新たに加わることによってこのような豊かな景観が損なわれることは避けなければなりません。

周辺の景観やその色彩をよく知り、建築物や工作物などの色彩をどのように関係づけていくかを考えることが、熊本らしい色彩景観づくりの第一歩になります。



■写真 草千里



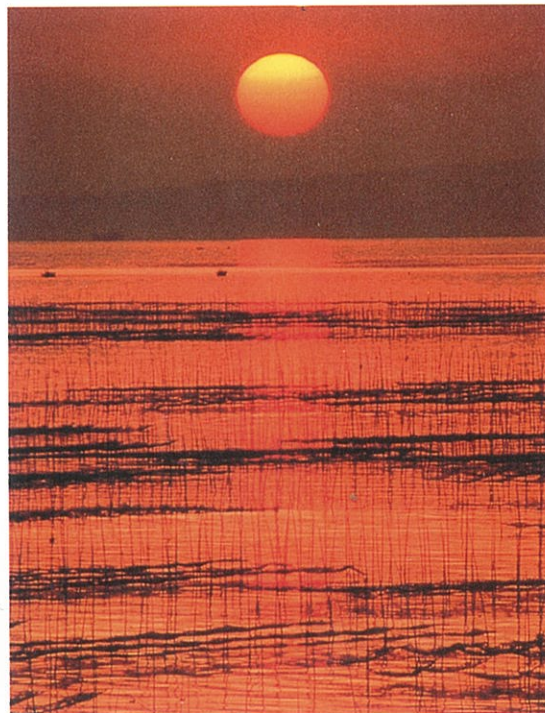
■写真 朝焼けの阿蘇

- 阿蘇の牧草の若草色
- 天草の海の碧
- 球磨川の流れの水色
- 空港周辺の畑の焦茶色
- 土蔵造りのまちなみの白や鼠色……

熊本らしい風景は、穏やかでやさしい色彩で織りあげられています。



■写真 広大な田園



■写真 有明海の落日

※このページの写真提供:熊本県観光振興課

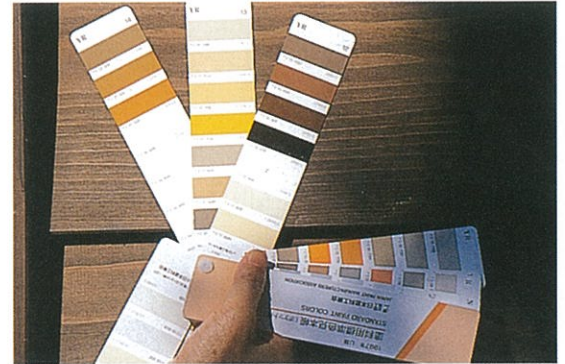


## 熊本らしい色彩景観を いかしていくために

### 1-4-1 周辺の景観の色彩を知る

#### ●周辺の色彩を調べよう

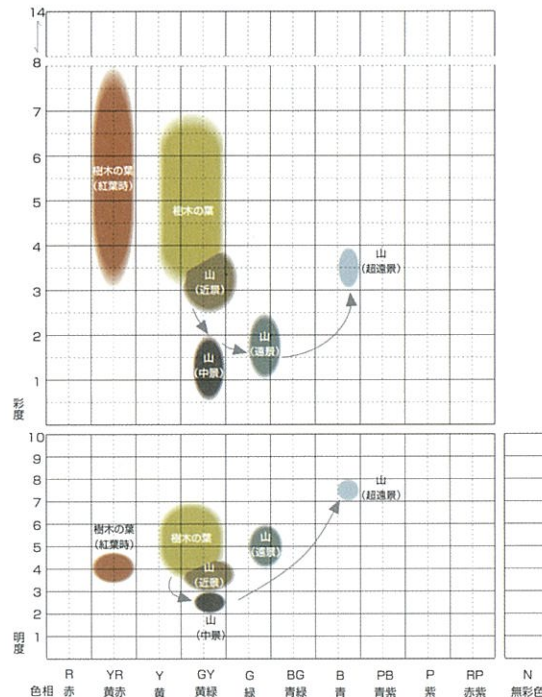
熊本らしい色彩景観をいかしていくためには、既にそこにある周辺の景観がどのような色彩で構成されているかを知ることが必要です。計画地周辺の自然や建物を観察したり、写真撮影することで、その景観の色彩を客観的に捉えることができます。また、こうした観察を一步進めて、市販の色票集や色見本帳を使って、より詳しく色彩を調査することも景観を知る有効な手だてになります。



■写真 市販の色見本帳を使った色彩の調査

#### ●自然の色を知ろう1—緑の色彩

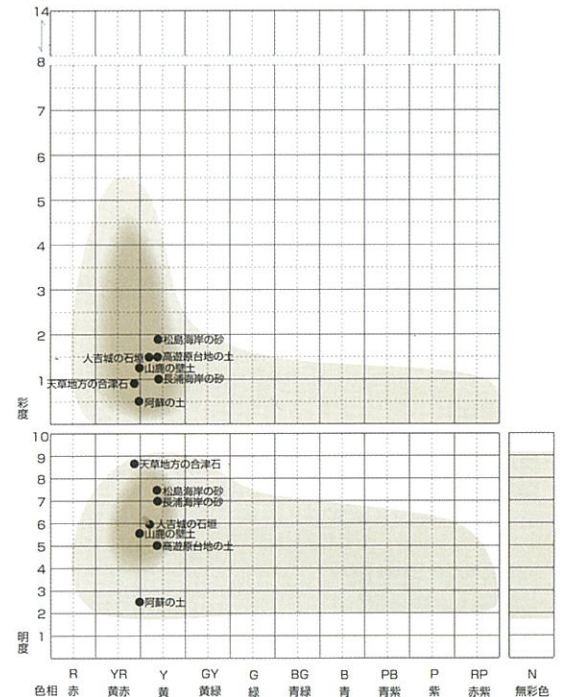
下の図は、一般的な樹木の葉や山の色を距離別に計測し、マンセル色度図に表現したものです。樹木の葉の色は、樹種によって基調色に幅があるばかりでなく、見る距離によって明度・彩度の幅が大きいことがわかります。また、落葉樹は秋に紅葉するため色相が大きく変化し、鮮やかさも増していきます。実測して得られる植物の色彩は、私たちが通常記憶している「緑」よりも全般的に穏やかで、見る視点や環境によって移ろいやすいものです。



■図 植物や山の色彩分布

#### ●自然の色を知ろう2—石や土の色彩

下の図は、熊本県内で産出される石や砂、土の色彩の分布を示しています。暗い阿蘇の土と明るい天草の石のように、明度には大きな開きがありますが、全体的にはYR(黄赤)系やY(黄)系の色相に属し、彩度は穏やかなことが特徴です。各地域で伝統的に用いられてきた建材は、こうした石や砂、土などを原料につくられていることが多く、これらの色彩を知ることが地域の色彩を知る大きな手がかりになります。



■図 熊本県の石や土の色彩分布



## 1-4-2 周辺環境との関わり方を考える

●目立たせる色彩とひかえめにする色彩を分類しよう  
周辺環境の色彩を把握したら、それらの色彩をどのように秩序づけたら景観がより良くなるかを考えます。

下の写真には、景観を構成するさまざまな要素が混在していますが、これらの要素を目立たせる必要があるものと、そうでないものに分けることが必要です。

公共的な視点から目立たせるべきものは彩度の高い色彩、ひかえめにすべきものは彩度の低い色彩を使います。

●建築物や工作物の基調色はひかえめに

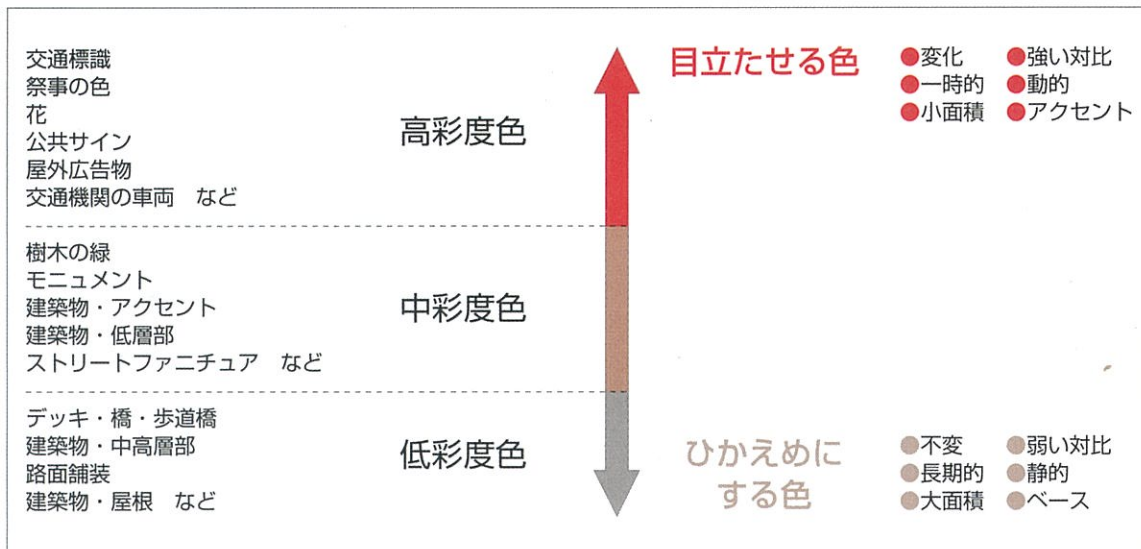
下の図は、景観の中で目立たせるべき色彩とそうでない色彩の序列をまとめた例です。

こうした序列は、それぞれ地域の環境によって異なりますが、一般的に考えて、建築物や工作物の基調色は、どちらかという背景としての序列、つまり、ひかえめにする色彩に位置づけることができます。

したがって、一般的な建築物や工作物の色彩は、景観において背景となる、自然の色彩や路面舗装色などと融和する、穏やかな色彩であることが基本といえます。



■写真 熊本市内



■図 目立たせる色彩とひかえめにする色彩の順位(例)



●建物の連なりがまちなみをつくります

建築物ひとつ、あるいは工作物ひとつでは景観は成り立ちません。ひとつの建物のまわりにはそれを取りまく環境があります。都市部では、隣り合う建物の連なりがまちなみを形成し、田園部や山間部、海浜部ではそうしたまちなみの周囲を豊かな自然が包み込んで、熊本らしい豊かな景観をかたちづくっています。

●隣り合う建物とのつながりを考えよう

隣り合う建物との色彩のつながりを考えることは、豊かなまちなみづくりの基礎になります。隣り合う建物どうしの色彩に共通性があれば、共通のイメージをもったまちなみになりますが、隣り合う建物の色彩が全く異なれば、にぎやかな反面、ややもすると混乱したまちなみになりがちです。

色彩に連続性があるまちなみでは

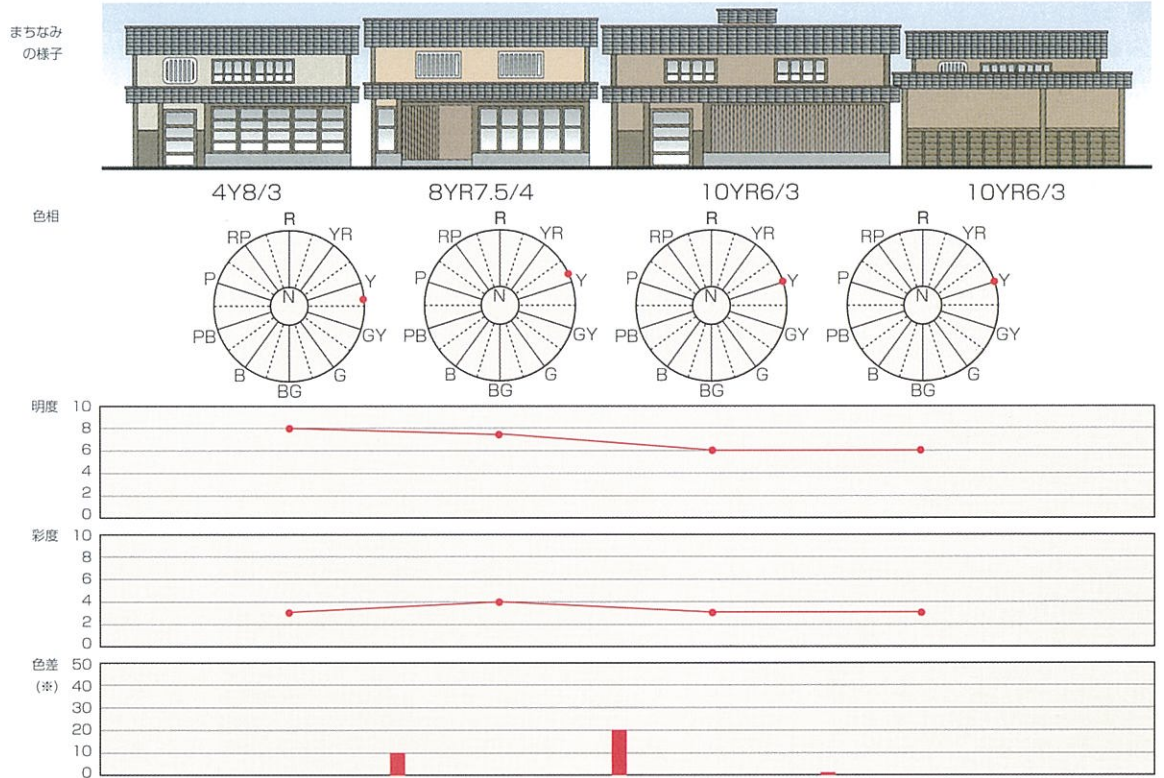
隣り合う建物の色の差が少なく、まちなみを構成する建物の色彩が一定の幅の中に収まっているため、まちなみに連続性や共通するイメージが生まれています。

この図の例では、色彩ばかりでなく、建物の形態や規模などにも共通性が見られ、まちなみのイメージを増幅させています。

※色差とは、2つの色の差を表わす数値で、一般には、色差計という測定機器を使用して算出します。

同じ色相で、マンセル明度が1違うと色差は10程度、マンセル彩度が1違うと色差は5程度といわれています。

■色彩に連続性があるまちなみ

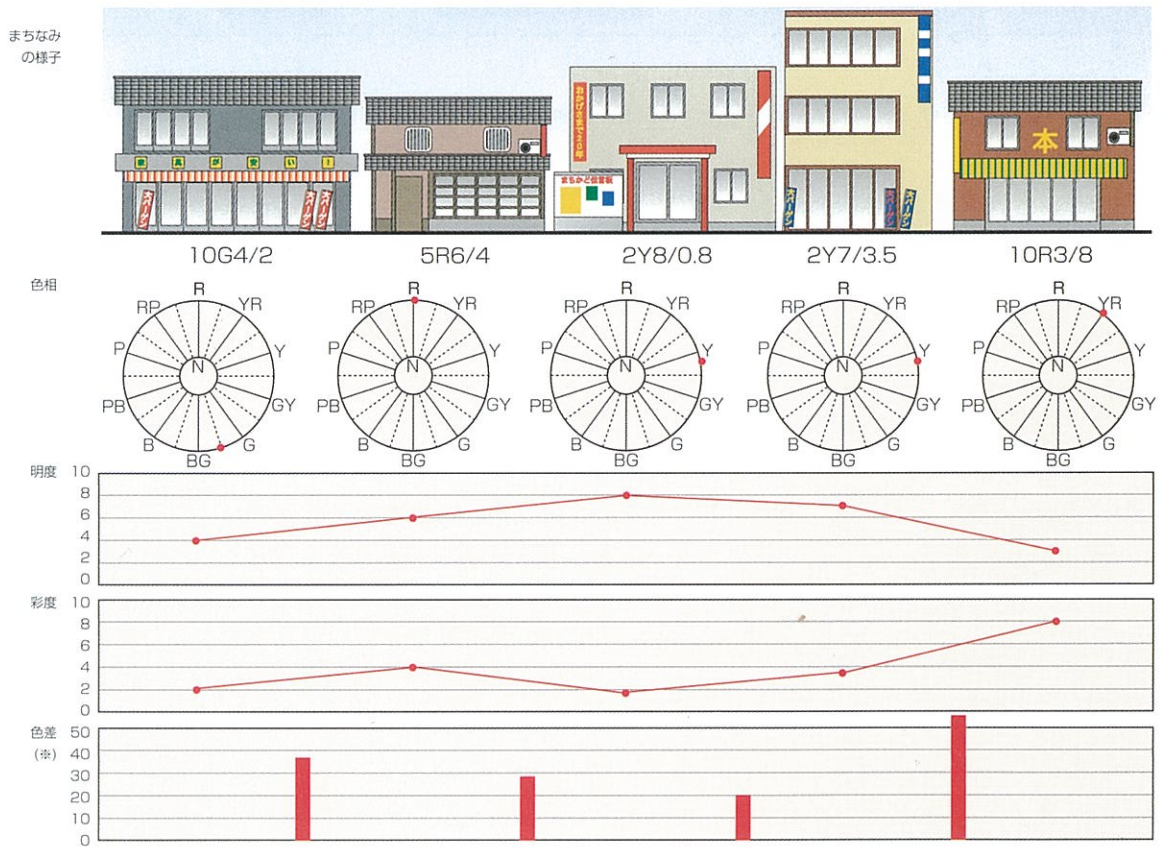


色彩に連続性がないまちなみでは

隣り合う建物の色の差が大きく、色相やトーンなどにも共通性が見られないため、まちなみのイメージがはっきりしません。

また、建物の高さや屋根の形式、広告物の掲出の仕方などにも共通性がないため、雑然とした印象を与えかねません。

■色彩に連続性がないまちなみ





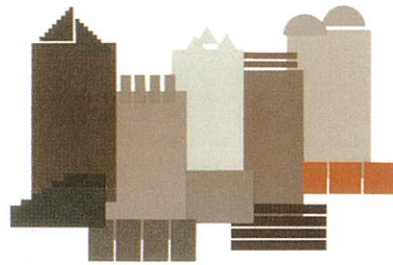
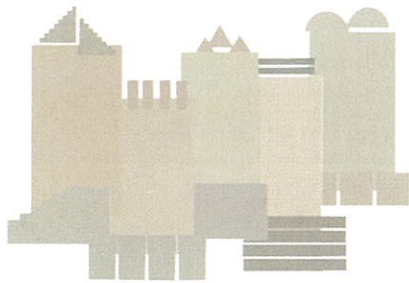
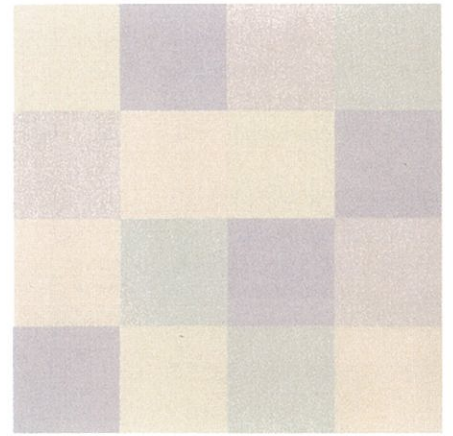
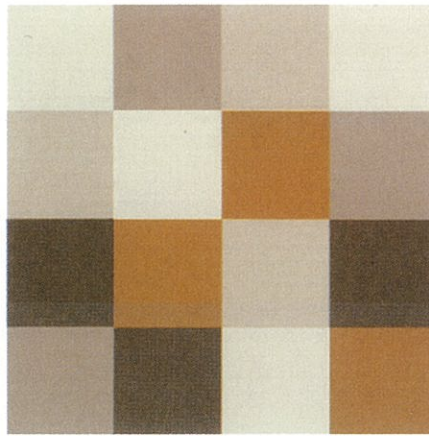
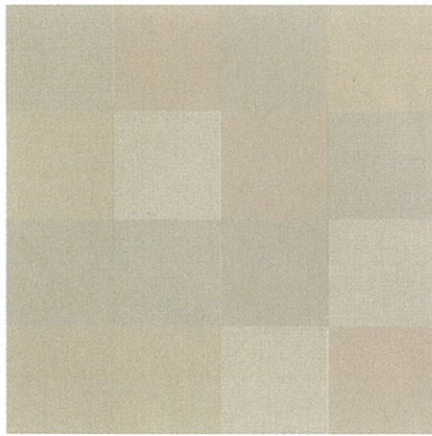
### ●隣り合う建物との調和を考えよう

隣り合う建物の色彩に連続性をもたせることが、まちなみのイメージをより明確にします。まちなみの色彩の調和を考えるときに、その手がかりになるのが、色彩調和の考え方です。ひとくちに色彩調和といってもさまざまな配色の方法が考えられますが、建物の色彩調和の場合は、次の3通りが基本となります。隣り合う建物が似た色を使ったり、色相やトーンをそろえたりすることが、色彩の調和のとれたまちなみをつくる基本になります。



■写真 類似色調和型のまちなみ—菊池市御所通り地区

菊池市御所通り地区のまちなみは白やグレーなどの色彩を基調とした建物で構成されています。また、一つひとつの建物も、白い壁に灰色の屋根というように、類似した色彩で構成されています。そのため、まちなみ全体が無彩色の「類似色調和」になっています。



#### ■類似色調和

よく似た色を使った配色

グレー系や茶系というように、似た色彩を組み合わせる配色です。こうした考え方でまちなみの色彩を構成すると、統一感が得られますが、同じような色彩で統一しすぎると単調になるおそれがあります。

#### ■色相調和

色相をそろえ、トーンに変化をつけた配色

色相を同一あるいは類似の範囲内に設定し、明度や彩度に変化をもたせる配色です。木や土等の自然材料を用いた日本の伝統的な家屋の多くは、暖色系色相による色相調和型配色になっています。

#### ■トーン調和

トーンをそろえ、色相に変化をつけた配色

トーンを同一あるいは類似の範囲内に設定し、色相に変化をもたせる配色です。隣り合う建物の色彩を穏やかなトーンでそろえ、色相に変化をもたせると、落ちついた中にも華やかさのあるまちなみを形成することができます。

■図 建物の色彩調和の基本



### 1-4-3 対象にふさわしい色彩を選ぶ

#### ●建物のイメージを考えよう

施設の機能や周辺の景観を念頭にしたイメージづくりを、建物の色彩は、そのイメージづくりのうえで、大きな役割を担っています。

一般的な建物の基調色は、鮮やかさを抑えた色彩がふさわしいといえますが、そうした色彩を用いても、色相や明度に変化をつけることによって、さまざまなイメージをつくるのが可能です。

下の図は、建物の外装に用いられる色彩とそのイメージを表わす言葉を明度と色相の軸にそって並べたものです。

色彩の捉え方には個人差があり、すべての人が同じイメージを共有することは困難といえますが、一般的に、R(赤)系やYR(黄赤)系、Y(黄)系などの色相は暖かく親しみやすいイメージに、BG(青緑)系やB(青)系、PB(青紫)系などの色相はクールでさわやかなイメージに感じられます。また、明度の高い(明るい)色彩は軽快に、明度の低い(暗い)色彩は重厚に感じられます。建物と色彩のイメージの関わりを考えることは大切ですが、色彩のイメージばかりを誇張すると景観から突出したものになりかねません。周辺の景観との調和があってはじめて、建物のよりよいイメージが形成されるものです。

#### ●建物としてよく見慣れた色彩を使おう

##### 親しみやすい暖色・無彩色系色相

日本の家屋に伝統的に用いられてきた木材や石材、瓦、しっくい、壁土、障子紙等の多くは、自然の材料を加工して得られたものです。

これらの建築材料の色彩を計測すると、ほとんどがN(無彩色)系やYR(黄赤)系、Y(黄)系などの狭い色相の範囲に収まってしまいます。

いいかえれば、私たちは永い間、狭い範囲の色彩で構成された建築空間に包まれて、生活を営んできたわけです。

私たちにとって、身近で見なれた色彩である、これらの建築材料の色彩は、私たちにやすらぎを与えてくれるばかりでなく、わずかな色彩の差を読みとり、それらを巧みに組み合わせる、繊細な美意識を養う源泉にもなってきました。

狭い範囲の色彩の中で美意識を養ってきた私たちが、普段見慣れない色彩を用いる際には、建物のかたちや機能、周辺との関わり方などに十分注意することが必要といえます。

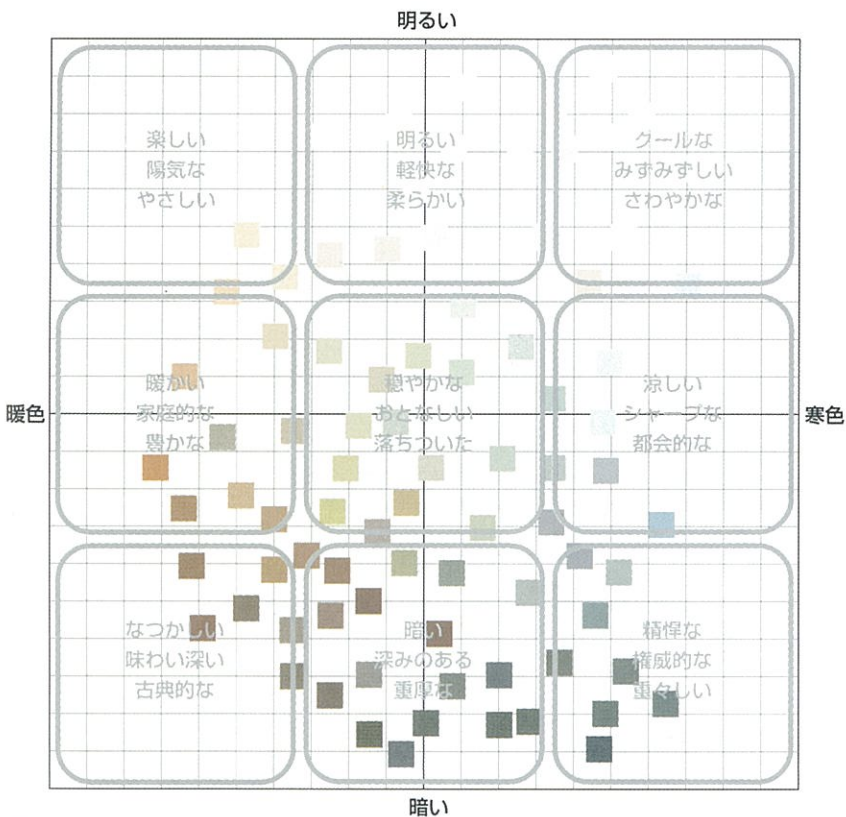
#### ●部位の機能にふさわしい色彩を選ぼう

##### 屋根色は暗く、穏やかに

人の手によく触れ、汚れやすい場所に、明るい色彩や鮮やかな色彩が適さないように、建築物の各部位にはそれぞれの機能に照らして、ふさわしい色彩や避けた方が無難な色彩があります。建物の屋根色として、さわやかな空をイメージさせる鮮やかな青や陽気なイメージの赤や黄色が用いられることが少なくありませんが、一年を通して風雨にさらされ、埃をかぶることが多い屋根色に、汚れやすい明るい色彩や鮮やかな色彩を使用することは避けた方がよいといえるでしょう。

また、屋根は建物の外装として大きな面積を占め、熊本らしい穏やかでやさしい色彩景観に大きな影響を与えます。

周辺とは明らかに異なる鮮やかな色彩を用いて、建物のイメージを誇張することよりも、地域の景観に対する配慮の方が重要といえるでしょう。屋根の色彩は、機能や景観への配慮に合致した、暗く、穏やかなトーンの色相が基本といえます。



■図 建物の外装に用いられる色彩とそのイメージ



## 熊本の色彩景観と色彩ガイドライン

### 1-5-1 色彩ガイドラインの性格

●柔軟な色彩選択ができるよう、色彩の範囲を広めに設定しています

この色彩ガイドラインの対象には、さまざまな規模や形態、材料の建築物や工作物が含まれます。さらに、その機能や用途、設置場所などをあわせて考えると、その条件は多岐にわたります。こうした建物の色彩を、ごく狭い範囲に閉じこめてしまうことは、熊本らしい豊かな色彩景観をつくっていくうえで、必ずしも効果的とはいえません。

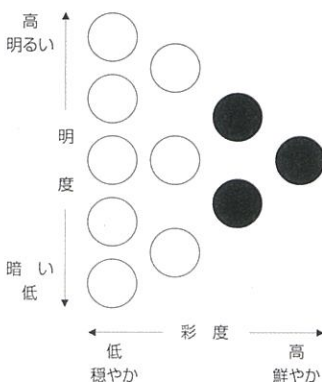
このため、ガイドラインでは、建物の条件に応じて柔軟な色彩選択ができるよう、色彩の範囲を比較的広く設定しています。

●避けた方がよい色彩の範囲を示しています

この色彩ガイドラインは、使用すべき色彩の範囲を示すというよりはむしろ、現在熊本のそれぞれの地域で多く使われている色彩との対比が強く、周辺環境に与える影響が大きいため、使用することを避けた方がよい色彩の範囲を示すという視点に立って色彩の範囲を設定しています。

色彩選択の柔軟性を高める必要から、ガイドラインの範囲内には、施設の機能や規模に照らして、必ずしもふさわしくないと考えられる色彩が含まれている可能性があります。

個々の施設の色彩設計に際しては、色彩ガイドラインの避けた方がよい色彩の範囲を遵守することばかりでなく、施設の機能や規模、周辺環境等を総合的に判断し、慎重な姿勢で色彩選択を行うことが必要です。



■図 避けた方がよい色彩の範囲(例)

### 1-5-2 推薦色・推薦配色

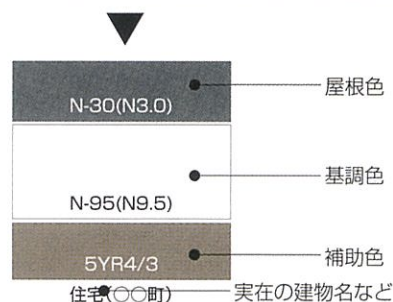
●色彩選択に迷ったら、推薦色や推薦配色を参考に色彩設計を進めてください

この色彩ガイドラインでは、使用することを避けた方がよい色彩の範囲とあわせて、外壁などの色彩として推薦できる色彩や配色を提案しています。

これらの配色の中には、地域の景観になじみ、地域の人々にも広く認められている、実在の建築物や工作物の配色をそのまま示したものも含まれています。そうした建築物や工作物の色彩や配色には、熊本らしい色彩景観づくりのエッセンスが隠されています。

下の図では、しっくい壁と燻し瓦で構成された実在の建築物の配色が、簡略化された配色図として示されていることがわかります。

色彩選択に迷った際には、各地域や施設ごとの推薦色・推薦配色を参考に設計を進めるとよいでしょう。



■図 地域の景観になじんだ建物とその配色(例)



## 熊本らしい色彩景観づくりのシステム —くまもとカラートーン

### 1-5-3 色彩ガイドラインの適用範囲と例外

●主に、外壁の基調色に対するガイドラインです  
この色彩ガイドラインは、主に外壁の基調色について、使用することを避けた方がよい色彩や推薦する色彩の範囲を規定したものです。ただし、こうした色彩ガイドラインを定めていない、屋根や建具、広告物などの色彩も、建物の外観や地域の景観づくりの上で重要な役割を果たしていることから、これらの色彩についてアドバイスを書き添えています。外壁基調色の選択時に参考にしてください。

※屋根の色彩の考え方については23ページのコラム、広告物の色彩の考え方については50～57ページの着彩図を参照してください。

●自然の素材色はガイドラインの例外として認められます

木材や土壁に代表される自然素材は、施工直後には使用することを避けた方がよい色彩の範囲に含まれていても、経年変化によって、穏やかなトーンに変色することが多いことから、ガイドラインの例外として、その適用を除外します。また、主に経済的な事由から色彩ガイドラインに沿った着色が困難な場合も考えられるため、表面に着色を施していない金属板やスレート、ガラスなどの素材色についても、色彩ガイドラインの例外として、その適用を除外します。

### 1-5-4 ガイドラインの範囲外の色彩の使用

●ガイドラインの範囲外の色彩を使用するときには十分なコンセンサスが必要です

地域の景観形成上重要な位置づけにあり、周辺の建物とは異なる色彩を使用することが必要と認められる建築物や工作物については、色彩ガイドラインの範囲外の色彩を使用することができます。

ただし、そのような場合は、周辺の景観に十分に配慮するとともに、色彩設計の主旨や、建物の各部に実際に使用する色彩を明らかにし、周辺の住民や関係する行政機関などの合意を得ることが必要です。

熊本らしい色彩景観づくりの実現に向けて、色彩ガイドラインを円滑に運用するための色彩表示体系として[くまもとカラートーン]を設定しました。

[くまもとカラートーン]には次のような特徴があります。

#### 1-6-1 現況の色彩景観をふまえたシステム

[くまもとカラートーン]の設定に先立って、広く県内の色彩調査を実施し、各地域の色彩の現況や、色彩景観づくりの課題を把握・分析しました。くまもとカラートーンは、現況の色彩景観を念頭に設定された、熊本県独自の景観色彩の表示体系です。

●色相とトーンによるシステムです

[くまもとカラートーン]は、色彩景観づくりの客観的な尺度として活用していただくために、マンセル表色系を基礎としています。

またその尺度は、客観的であると同時に感覚的にも理解しやすいものである必要があると考え、印象がよく似ている明るさ、鮮やかさをもつ色彩をグループ化した「トーン」の考え方を導入し、色相とトーンで色彩を表わすシステムとしています。(※「トーン」は9ページ参照)

●低彩度トーンを充実させています

[くまもとカラートーン]は、熊本の豊かな自然景観によくなじみ、建物の外装に多く用いられている低彩度のトーンを充実させ、建物の色彩としてはあまり用いられない鮮やかなトーンはひとまとめにすることによって、色彩景観づくりへの実効性を高めています。

●暖色系色相の選択肢を広くとっています

[くまもとカラートーン]は、建材の色彩として古くから用いられ、標準品の選択肢も広い、R(赤)系、YR(黄赤)系、Y(黄)系の色相では、より自由度の高い色彩選択ができるように、また、建物の色彩としてはあまり見慣れない、その他の色相では、より慎重な色彩選択を促すように各トーンの範囲を定め、実用性に配慮しています。



## 1-6-2 既存の基準や指針の具体化

●これまでの基準や指針との整合を図っています  
 [くまもとカラートーン]の設定に先立って、景観条例による届出が義務づけられている、景観形成地域や特定施設届出地区、大規模行為において、既に用いられている色彩の基準や指針を再確認しました。

これまでの基準や指針には曖昧な表現もあり、多くの人々が共有する必要があるガイドラインとしては、やや不向きな点がありました。

また、部分的にはマンセル表色系を用いた具体的な指針も設けられていることから、これらの基準や指針と矛盾せずに、曖昧な部分を解消するためのシステムとして設定されたのが[くまもとカラートーン]です。

## 1-6-3 景観に関わる色彩表示の標準化

●全県共通のカラーシステムです  
 これまでの基準や指針は、地域ごとに微妙に異なる表現が用いられ、担当者によって、その解釈も異なるところがありました。

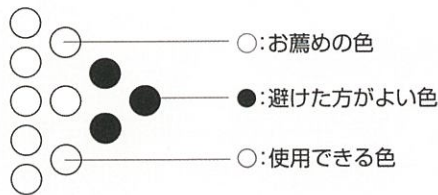
地域を超えて県内各地で景観づくりに携わる設計者や施工者の方々も多いことから、全県共通の表示体系として、景観づくりに用いられる色彩を標準化するために設定されたのが[くまもとカラートーン]です。

[くまもとカラートーン]は、熊本県独自の景観色彩の表示体系ですが、国際的に広く用いられているマンセル表色系を基礎にしていることから、全国で流通している建材や塗料などにあてはめて考えることも可能です。

### 色彩ガイドラインからは次のことが読みとれます

色彩ガイドラインでは、基調色として使用することを避けた方がよい色彩の範囲を、色相とトーンを組み合わせたシステムによって示しています。

例えば、右の図のような色彩ガイドラインからは以下のことを読みとることができます。



**コラム**  
**色彩ガイドラインの読み方**

### ●1—外壁基調色として避けた方がよい色彩がわかる

●の範囲に入る色彩は、各地域で現在多く使われている色彩との差が著しく、周辺環境に与える影響が大きいため、建物の基調色として使用することを「避けた方がよい」としています。

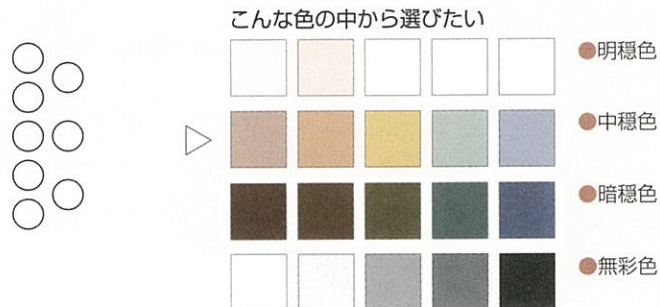
20・21ページには、各トーンの代表色が示してありますので、各地域・施設ごとの基準と照らし合わせ、どのような色彩を避けるべきか判断してください。



### ○2—外壁基調色として使用できる色彩がわかる

○の色彩の中から基調色を選択することができます。ただし、この範囲に収まっていればどのような色彩を使用しても良い結果が得られるというわけではありません。色彩ガイドラインを遵守することはばかりでなく、施設の機能や規模、周辺環境等を総合的に判断し、慎重な姿勢で色彩選択を行うことが必要です。

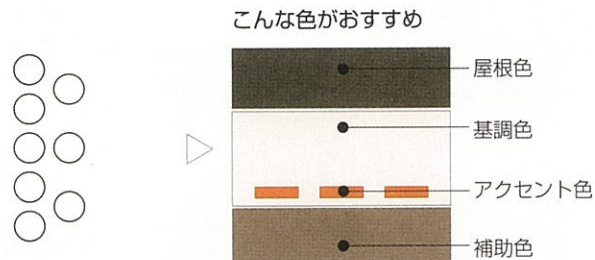
ガイドラインの各ページにはそうした色彩選択のヒントが書き添えられています。



### ●3—色彩選択に迷ったときにお薦めの色彩・配色がわかる

基調色として使用することができる○の色彩の範囲の中から、各地域・施設の基調色としてお薦めできる色彩の範囲を○で示し、その具体的な色彩や配色を提案しています。これらの色彩や配色は各地域で親しまれ、地域の景観との対比が少ないものになっています。

色彩選択に迷ったときには、この推薦色や推薦配色を参考に、色彩設計を進めてください。





### 1-6-4 くまもとカラートーンによる色の分類

● 11のトーングループで構成されています

[くまもとカラートーン]では、すべての色彩を彩度(鮮やかさ)別に4段階に分け、更に明るさを加味して全体で11のトーンに色彩を分類しています。

それぞれのトーンには、明るく穏やかな「明穏色」などのように、色彩の印象を反映した独自の名称が設定され、各地域・施設のガイドラインのページでは、こうしたトーンの名称によって、使用することを避けた方がよい色彩とお薦めの色彩を示しています。

各地域、施設の色彩ガイドラインと、このページを照らし合わせながら、色彩設計を進めてください。

● 無彩色グループ—白色・明灰色・中灰色・暗灰色  
白・灰色・黒のグループ

明度

白色	N10～N9
明灰色	N9～N8
中灰色	N8～N6
暗灰色	N6～N3
黒色	N3～N0

● 低彩度色グループ—明穏色・中穏色・暗穏色  
くすんだ穏やかな色彩のグループ

	色相	明度	彩度
明穏色	R・YR・Y系	10～8	0～3
	GY・G・BG・B・PB・P・RP系		0～1
中穏色	R・YR・Y系	8～5	0～3
	GY・G・BG・B・PB・P・RP系		0～1
暗穏色	R・YR・Y系	5～0	0～3
	GY・G・BG・B・PB・P・RP系		0～1

● 中彩度色グループ—明清色・暗清色  
澄んだ色味の強い色彩のグループ

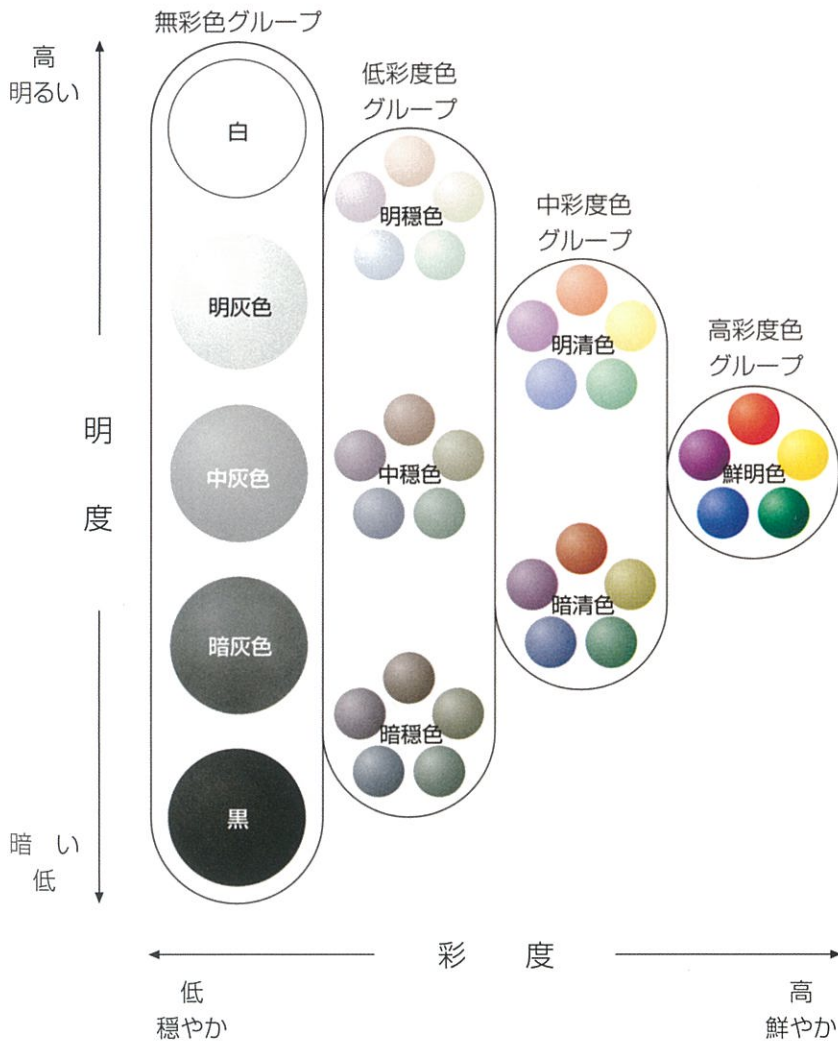
	色相	明度	彩度
明清色	R・YR系	10～6	3～6
	Y系		3～4
	GY・G・BG・B・PB・P・RP系		1～2
暗清色	R・YR系	6～0	3～6
	Y系		3～4
	GY・G・BG・B・PB・P・RP系		1～2

● 高彩度色グループ—鮮明色  
非常に鮮やかな色彩のグループ

	色相	明度	彩度
鮮明色	R・YR系	全域	6以上
	Y系		4以上
	GY・G・BG・B・PB・P・RP系		2以上

※1—各トーンのマンセル記号による範囲を上表に示しました。

※2—2つのトーンの境界にある色彩は、両方のトーンに属します。



■ 図 11種類のトーングループ



## くまもとカラートーンの色見本

## 1-7-1 さまざまな色彩の伝達方法

色彩を伝達する方法として、色名やマンセル記号などが用いられますが、もっとも確実なのは実物を直接やりとりする方法といえるでしょう。建築物や工作物の色彩は比較的大きな面積で用いられるため、より正確な色彩の伝達が必要になります。

建築物や工作物の計画では、建材のサンプルや色見本などによる色彩の伝達をもっとも一般的な方法といえます。

## 1-7-2 日本塗料工業会標準色見本帳

実物サンプルや色見本にもさまざまな種類があります。メーカー各社が体系化しているものもあれば、製品ごとにサンプル帳が用意されているものもあります。

これらの色見本の中で、もっとも一般的なもののひとつに、隔年に発行される『日本塗料工業会標準色見本帳』が挙げられます。

この見本帳は、塗料の色彩を標準化することを目的につくられていることから、建築物や工作物の塗装色の指定にも多用されています。この見本帳は、(社)日本塗料工業会や塗料会社、塗装会社などから購入することができます。

## 1-7-3 日本塗料工業会標準色見本帳の記号体系

日本塗料工業会標準色見本帳では、色彩のものさしであるマンセル表色系を基礎とした、独自の記号体系を採用しています。

各色彩にはマンセル記号も併記してありますので、これを参考にした色彩選択もできます。

## 1-7-4 各トーンの代表色

日本塗料工業会標準色見本帳の色彩を中心に、19ページの各トーンを代表する色彩を選びました。

日本塗料工業会標準色見本帳にない色彩や、塗料以外の材料を用いる場合は、マンセル記号によって色彩を判断することができます。

	●明穏色	●中穏色	
●R	05-90B(5R9/1)	*05-80B(5R8/1)	05-75B(5R7.5/1)
	05-85B(5R8.5/1)	*(10R8/1)	09-70D(10R7/2)
	(10R9/1)	*09-80D(10R8/2)	07-70F(7.5R7/3)
●YR	19-90A(10YR9/0.5)	15-85B(5YR8.5/1)	19-75B(10YR7.5/1)
	19-90B(10YR9/1)	19-85B(10YR8.5/1)	19-75C(10YR7.5/1.5)
	19-90C(10YR9/1.5)	19-85C(10YR8.5/1.5)	19-70B(10YR7/1)
	19-85A(10YR8.5/0.5)	*19-80C(10YR8/1.5)	19-70C(10YR7/1.5)
●Y	25-90A(5Y9/0.5)	22-85B(2.5Y8.5/1)	22-75B(2.5Y7.5/1)
	22-90B(2.5Y9/1)	22-85C(2.5Y8.5/1.5)	25-75B(5Y7.5/1)
	25-90C(5Y9/1.5)	*22-80B(2.5Y8/1)	22-75C(2.5Y7.5/1.5)
●GY	*35-90B(5GY9.0/1)	*35-85B(5GY8.5/1)	*(5GY7/1)
●G	45-90A(5G9/0.5)	*49-80B(10G8/1)	*(5G7/1)
●BG	*55-90B(5BG9/1)	*55-85B(5BG8.5/1)	*55-60B(5BG6/1)
●B	*65-90B(5B9/1)	*65-80B(5B8/1)	*(5B7/1)
●PB	*75-90B(5PB9/1)	*75-80B(5PB8/1)	*(5PB7/1)
●P	*85-90B(5P9/1)	*85-80B(5P8/1)	*(5P7/1)
●RP	*95-90B(5RP9/1)	*95-80B(5RP8/1)	*(5RP7/1)
	●白	●明灰色	●中灰色
○N	N-95(N9.5)	N-85(N8.5)	N-65(N6.5)
	*N-90(N9.0)	*N-80(N8.0)	*N-60(N6.0)



	●暗穩色	●明清色	●暗清色	●鮮明色	
05-60B(5R6/1)	09-30D(10R3/2)	(5R8/4)	09-40L(10R4/6)	07-40P(7.5R4/8)	●R(赤)系
09-60B(10R6/1)	09-20D(10R2/2)	(10R8/4)	07-30L(7.5R3/6)	07-40X(7.5R4/14)	
05-60F(5R6/3)					
17-70D(7.5YR7/2)	15-40D(5YR4/2)	12-80H(2.5YR8/4)	12-50L(2.5YR5/6)	12-70T(2.5YR7/10)	●YR(黄赤)系
19-70D(10YR7/2)	19-40D(10YR4/2)	17-80H(7.5YR8/4)	17-50L(7.5YR5/6)	12-60X(2.5YR6/14)	
17-60D(7.5YR6/2)	22-30D(2.5YR3/2)	15-70H(5YR7/4)	17-50P(7.5YR5/8)	19-75X(10YR7.5/14)	
17-50D(7.5YR5/2)	15-30F(5YR3/3)	17-70H(7.5YR7/4)	15-40H(5YR4/4)		
22-70B(2.5Y7/1)	22-40D(2.5Y4/2)	27-85H(7.5Y8.5/4)	22-50H(2.5Y5/4)	22-80V(2.5Y8/12)	●Y(黄)系
29-70B(10Y7/1)	29-40D(10Y4/2)	22-70H(2.5Y7/4)	29-40H(10Y4/4)	22-70L(2.5Y7/6)	
22-60D(2.5Y6/2)					
	*35-30B(5GY3/1)	*35-80D(5GY8/2)	*37-50D(7.5GY5/2)	35-70H(5GY7/4)	●GY(黄緑)系
	*(5G4/1)	*45-70D(5G7/2)	*(5G5/2)	45-50T(5G5/10)	●G(緑)系
	*55-40B(5BG4/1)	*55-80D(5BG8/2)	*55-50D(5BG5/2)	59-60H(10BG6/4)	●BG(青緑)系
	*(5B4/1)	*65-70D(5B7/2)	*69-50D(10B5/2)	69-60H(10B6/4)	●B(青)系
	*(5PB4/1)	*72-70D(2.5PB7/2)	*75-40D(5PB4/2)	72-40T(2.5PB4/10)	●PB(青紫)系
	*(5P4/1)	*85-70D(5P7/2)	*85-40D(5P4/2)	85-60H(5P6/4)	●P(紫)系
	*(5RP4/1)	*(5RP7/2)	*(10RP4/2)	95-70H(5RP7/4)	●RP(赤紫)系

●暗灰色

N-50(N5.0)
N-40(N4.0)

●黒

N-20(N2.0)
N-10(N1.0)

●N(無彩色)

※1—このガイドラインは、プロセス印刷によるため、見本帳の色彩とは異なります。

※2—色見本に記してある日本塗料工業会標準色見本帳の色番号は年号表示のアルファベットを省略しています。

※3—マンセル記号のみが記してある色彩は、日本塗料工業会標準色見本帳に含まれない色彩です。

※4—記号の前に\*のついた色彩は2つのトーンにまたがっています。